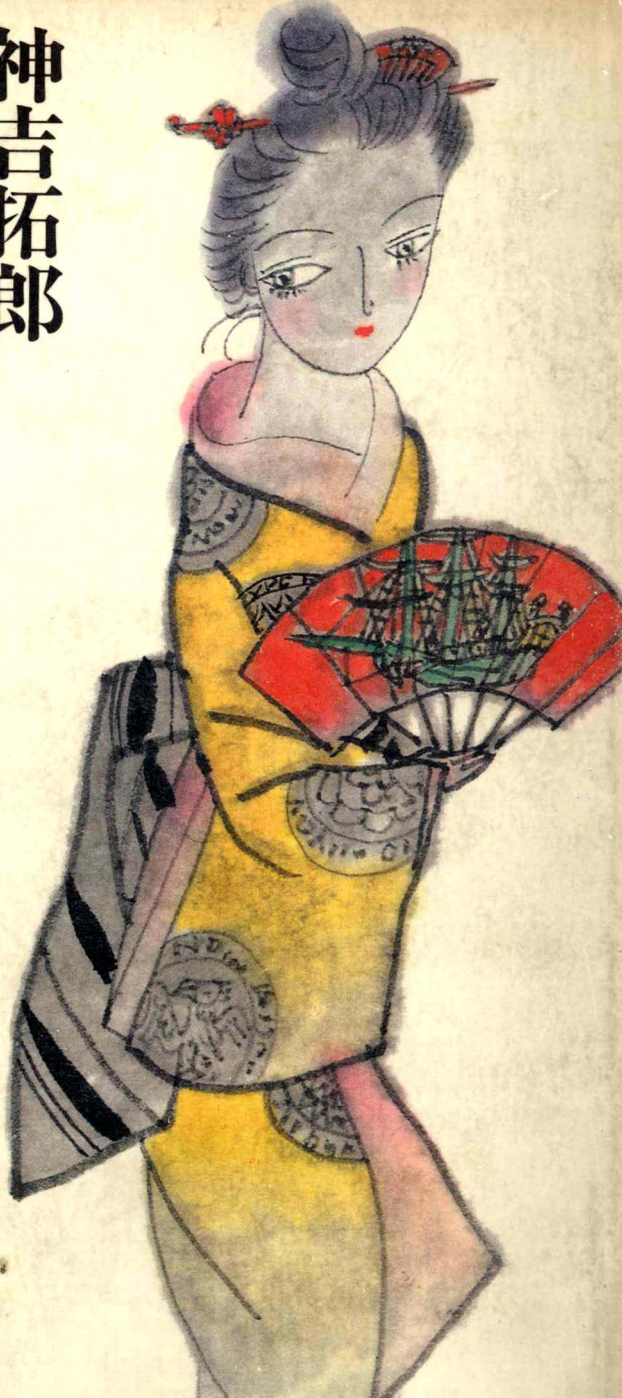


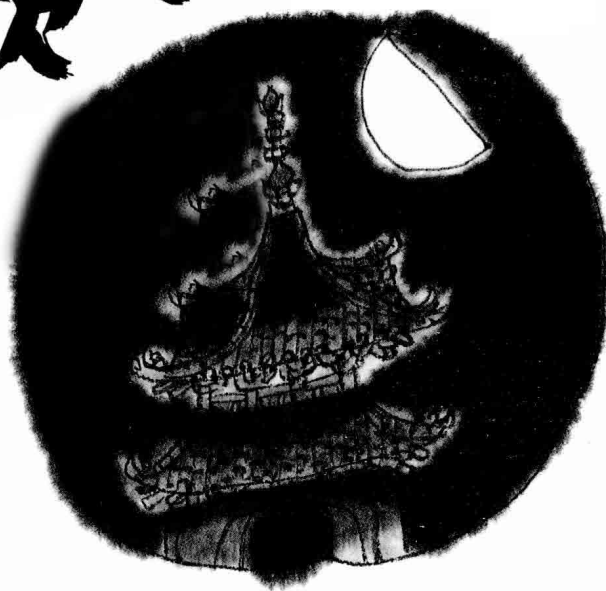
神吉拓郎

おらんが恋歌



神吉拓郎

おらん
恋心
うた
歌



読売新聞社

おらんだ恋歌 定価 1 2 4 0 円

第1刷 1989年(平成元年)6月10日

著者 ^{かんき}神吉 ^{たくろう}拓郎

編集人 篠原 義近

発行人 杉林 昇

発行所 読売新聞社

東京都千代田区大手町1の7の1 〒100-55

大阪市北区野崎町8の10 〒530

北九州市小倉北区明和町1の11 〒802

名古屋市中区栄1の17の6 〒460

印刷所 図書印刷株式会社

製本所 寿製本株式会社

ISBN4-643-89032-0 C0093

©1989, Takuro Kanki

落丁本・乱丁本はお取り換えいたします。

◇おらんだ恋歌 目次◇

新甲比丹	5
長崎の月	23
北からの風	69
江戸へ	113
海賊	143
長い船間	203
虹の向う	254
装丁・村上 豊	

おらんだ恋歌

おおば比呂司さんに……

新甲比丹^{かびたん}

春も終りかけていた。

きらきらと輝く太陽が、稻佐の山の方角に、傾いている。

夕凧^{ゆうなぎ}の時間で、海は群青色^{ぐんじょういろ}の一枚の敷物をのべたように静かだ。

長崎出島の蘭館の一室で、若い商館員が、玉突きに興じていた。相手は、丸山の馴染^{なじ}みの遊女である。

小柄な妓だが、南国の女らしく早熟で、すこしばかり吊り上った目が、利発そうな光を帯びている。

「筋がいいな。あんたはきつと上手になる」

「そうかしら」

女は、構え直すと、じつと狙^{ねら}いを定める。

真剣になると、小さな唇^{くちびる}がすぼまって、だんだんと尖^{とが}ってくる。

勢いよく突き出すと、玉と玉は、小気味のいい音を立ててぶつかり合い、はじかれた方の玉は、

緑の羅紗^{ランシャ}を張った台の隅の穴に転がり込んだ。

「うまい」

若い商館員は、とんとんと、自分の手の中の玉突き棒^{しり}の尻で、床を突いて、嘆声を洩らした。

「いい音……。あたしは、玉の触れ合う、この音が好き」

女は、目を細めて、そういう。

「今ので、いいの」

「よろしい。しかし、すこし力を抜けば、もっといい」

「力を抜くって……」

女は、首を傾げた。

「柔らかにね」

若い商館員は、笑っている。笑うと、まるで少年の顔になる。

「あんたが、ぼくの手を握ってくれるときのように」

女は、くすくすと、情のこもった忍び笑いをした。

「こんなふうに……」

「そう、こんなふうにさ」

夕方の色が、部屋のなかに漂い始めていた。

女は、若い商館員の手をとったまま、窓辺へ行き、夕焼けの空を眺めた。

「さっき、ドゥーフさまを見掛けたわ」

「そうかい」

「なにか、考えごとをしてらしたみたい。お辞儀をしても気がつかずに行ってしまったわ」
若い商館員は、肩をすくめて、いった。

「甲比丹^{かびたん}は、気が重いんだ。問題が山とあってね」

商館長ドゥーフは、出島の裏手、つまり海側にある菜園のほとりにいた。

彼ご自慢の菜園である。

出入りの日本商人が持って来ない西洋野菜、キャベツとか、菊ちさとか、セルリのたぐいを、彼は使用人に命じて、この菜園で作らせている。

すこしでも、食卓に故国のいろどりを添え、館員を楽しませようという算段だ。

ドゥーフは、二十七歳。

前任者のワルデナールは、喘息^{ぜんそく}を理由に、前の年に、バタビアに帰ってしまい、ドゥーフが新しい甲比丹に昇格して、まだ日が浅い。

「こんな湿気の多いところにいたのでは、悪くなるばかりだからね」

ワルデナールは、そういったが、これは少々怪しいのではないかと、ドゥーフは思っている。
甲比丹の任期は、ふつう五年となっているが、それを二年もあまして、忽々^{そうそう}に逃げ帰って行っ

たのは、なにか別の理由があったとしか思われない。

だいたい、バタビアは、長崎よりも、もっと湿度の高い土地ではないか。ドゥーフもバタビアはよく知っている。

はつきりいえば、ワルデナールは、日本相手の貿易に見切りをつけて、転身をはかっているのではないか、と、ドゥーフは察したのだが、上司だし、先輩でもある彼に、そこまで問いただす気にはなれなかった。

ドゥーフにも、去ったワルデナールの気持が、わからないでもない。

彼等と一緒に、長崎に着任したとき、出島のオランダ商館の屋台骨は、まさに危機に瀕していった。

その二年前に、出島は大火事を起して、建物のあらかたは焼け落ち、その時、出島を留守にして江戸参府の旅に出ていた甲比丹ヘンメーは、途中、掛川で病死するという具合で、不幸続きの上に、会計にはぼっかり大穴があいているという始末。

そのあとを預るべき責任者のラスは、手をこまねいて溜息をつくばかりで、なにもしていない。ワルデナールも、ドゥーフも、その状態を見て、愕然とした。

一説によると、商館の負債二万一千二百七十二両、ヘンメー個人の負債一万一千百六十二両、その他館員などの負債およそ一万五、六千両というから、穴は小さくなかった。

その苦境のなかで出島を預かることになったドゥーフだが、彼は身うちに、ふつつつとたぎる

何かを感じていた。

若さというものは強い。

闘志といおうか、意地といおうか、この青年には、世にも稀な負けじ魂が宿っていたように思える。

「ワルデナールは、逃げて行った。いいじゃないか」

彼は呟いた。

「あの男は、見切りをつけた。誰だつて危ない橋を渡りたい奴はいない」
彼は頷いた。

「しかし、私は逃げない。思いがけず射止めた商館長という椅子だ。この程度の困難でひき下がりはしない。どこかに打開の道は見つかる筈だ。打てるだけの手を打って、それでも駄目なら降りればいいさ。それまでには、まだ時間もある」

そう考えると、急に気が軽くなった。

ドゥーフは、小脇にはさんだ愛用の細身のステッキを、手に持ちかえると、歩き出した。

「……まず、部下に、そして日本人たちにも、決して動じた色を見せないことだ」

二十七歳の若い甲比丹は、自分に誓った。

そのとき、ふと頭に浮んだのは、東印度会社の手代に取り立てられて、本国を出発した十九歳の頃のこゝろのことだった。

「東印度会社の社員である君は、或るときは政治家であり、或るときは軍人であり、探險家であり、そして、それ以上にすぐれた商人でなければならん。わかつてるね」

上役は、そういつて、ぼんと彼の肩を叩き、そして東洋への危険きわまりない航海へ、気軽に彼を送り出したものである。

その上役は、毎度、同じせりふを使って、年間何百艘もの船を、死地へと送り出すのが役目であつた。

「もし、無事に勤め上げて、本国へ帰ったら、まず、あの男に会いたいな。そして、今、隣の家まで行つて来たような顔でいつてやりたいな……」

ドゥーフは、にやりとした。

「やあ、今帰ってきました」

と、それだけでいいな、と、彼は、そう思った。

頭を上げて見渡すと、出島をめぐる海も山も、すっかり陶器のあの染付けのような藍一色のかに沈んでいる。

その小高くなつたあたりに、ぼつり、ぼつりと灯がともし始めた。
次から次へ、その灯は数を増して行く。

長崎は天然の良港である。

湾口は、南西を向いていて、これは、春から秋にかけての季節風とも一致している。

当時の帆船には、出入にたいへん都合がいい。

南西の季節風に乗って渡来した船は、秋から冬にかけての北東の季節風を利用して帰途につくのである。

長崎に近づいた船が、まず目にするのは、多分、南へ伸びた野母崎のもどきの権現山ごんげんやまの姿だろう。その左手に、やがて高島が見えてくる。

オランダ船は、続いて姿を現わす伊王島の北側を廻る水路を通過することに決められている。吃水きゅうすいの関係もあったのだろう。

伊王島の南を通して直進する水路は、浅瀬や岩礁が多く、唐船その他に限られていた。

その唐船も、北東の風に変る冬場には、オランダ船と同じ進入路をとることになっていたようである。

さて、香焼かうやき、高鉾たかほなどの島を経て、内湾に入ると、右に戸町、左に西泊と、二つの番所があり、湾の奥、右手の方に、紅白青の三色の鮮やかな横縞よこしまのオランダ国旗がひるがえるのを目にするこ
とが出来る。

これが、史上に名高い、長崎出島である。

出島は眇びようたる点であった。

この島は、埋め立てによる人工島で、広さは四千坪足らず、形だけは、みやびな、扇面をかた

どっている。

そして、一本の橋で、対岸の江戸町へとつながっていた。

甲比丹ドゥーフは、島の東南の隅、花畑の家に仮住いをしている。

先年の大火のあと、焼失した建物は、次々と建て直されたが、甲比丹の住居は、まだ再建されていない。

その故の仮住いである。

花畑の奥の家の、甲比丹の部屋には、毎晩、遅くまで灯がともっていた。

夏前の出島は、一年でいちばんのどかな状態にある。

オランダ船の定期の入港までは、まだ日があったし、館員も、使用人たちも、のうのうと、好日を楽しんでいた。

音楽を奏で、酒を飲み、やがて彼等も寝静まった出島のなかで、甲比丹ドゥーフだけは眠れずに、帳簿を繰り、思いにふけていた。

「まだ、起きていらっしゃるの」

女の声で、ドゥーフは、ふっと我にかえった。

ドゥーフの寵妓、丸山の遊女小菊である。

ひと眠りしたあとと見えて、霞のかかったような美しい目が、微笑んでいる。それをしおに、ドゥーフは、あかりを消すと、寝所へ入って行った。

枕もとの小さな卓子^{ダイブ}には、温めたココアの大きなコップが用意されている。

ドゥーフは、大きく伸びをすると、天蓋^{てんがい}のついた広い寝台に横になった。

ココアをちびちびと啜^{すす}っていると、女の柔らかな手が、足をゆっくりと揉^もみほぐしてくれる。

彼は、満足の溜息をもらした。

そして、丹念で、巧みな指の動きに身をまかせた。

「ふしぎな国だな、この国は……」

「え」

女の手がとまった。

「……いや、なんでもない」

ドゥーフは、いった。

「独^{ひと}り言だ。このごろ、独り言をいう癖がついてしまつてね」

女は、ドゥーフの言葉を、ほとんど理解出来ない。ただ、恐ろしい勘の良さで、ドゥーフの心を読み取ることが出来るらしい。

ドゥーフは、遊女が気に入っていた。

出島に遊女の出入りを許したこの国の政府に感謝しなくてはならないな、と思う。

出島には、遊女以外、一切の女子の出入りを禁じられていた。オランダ人の妻女も例外ではない。折角この国まではるばるやって来ながら、泣く泣く帰って行った例も耳にしている。

突然、女がくすくすと笑った。

笑いながら、ドゥーフの足を揉んでいる。

彼がいぶかしげな顔を見せると、女はいった。

「ポルトガルやオランダの人は、カカトが無いんだ、と、子供の頃よく聞いたものだけど……」

「カカト、ああ」

ドゥーフは、苦笑した。日本人の間では、そんな風説があつたそうである。靴で踵を隠しているからだろう。

「そういえば、私も、日本人の女は、だいたい部分が横に裂けているという噂を信じていたものだよ」

女は彼の足を叩いた。

ドゥーフが抱き寄せると、彼女は待っていたように、腕の中に倒れ込んで来た。細くてしなやかな身体であつた。

どれほどたつたらうか。ふっと目覚めると、傍に女の姿がなかった。

春の闇は、ふかく、柔らかい。

そのなかへ、甲比丹の住いの裏から、するりと、ひとつの影が、すべり出た。

忍びやかに、番所の目を避けて、慎重に、物陰を選び、島の裏手へと廻って行く。